

堅岩にもあらず。又土にもあらぬ白壁なるか、こも又前の、だむだら崑にひとしく、五段、六段横さまに割れひゝらきて、そがすがひに扁片たるつゝれ石を挟みつゝ、四十間まりに連絡べわたれるに、目まとひせられてしましイミぬ。また左の方に二筋の細き滝あり。般木の滝といふ。高さ十四・五丈はかりか、碗脱岩に障らへて、白糸をなせる如く落下れる、いと佳麗し。又此処より少しく踏る淵中の、いさゝか左によりて、魚の肚摺岩と云ふあり。堅一丈」に横二丈もやあらむと覚しき岩あり。此流れを踏る魚とも、此岩に肚をすねは、鮎は産ミ得ぬよしにや有けむ、必ずしかせぬ魚はあらしとて、さる名を負せしとなり。こを遍ること一丁はかり行て、柴倉の滝と云あり。又柴倉の沢とも云ふ。此滝しきもせる樹に蔽れて、半らひ許りより下のミ見えたるが、裂つ摧けつ紆り曲りて、涓々落下れる景況、いと佳く、いと愛たく、あはれ前裁にありなましかは、さこそ涼しからめともしまれぬ。さてこを過り三丁はかりにして、音に聞つる曲洑てふ峻絶のもとに至れり。抑この処の形勢をかつ／＼云むに、右は魏々なる大畧山にて、只眠るさへも冷眼しく、頂上には樹々いみしく鬱茂らひ、山深く連綿綿わたりて、凝しく雲にかくれ、又左も二十丈はかりの嶄絶にして、半ほとより上大樹とも、の横さまに生ひ伸ばひて、枝を組葉をまじえつゝ、逆しまに疎え下りて、日の光りを隠す。水は西より流れ、東の岸を突て南に曲り、ゆくらく／＼にやれ動き、いぶせく、あやしく、滄々潭々て底際し

えす。岸の隈、水のくま、霧をおはひていと昏闇く、冷冽かなるいぶき溪中に溢れて、其蕭殺く凜凄き景況は、言にも筆にも尽し得ず。かゝれはい漕きわたらむ便なく、又岸の汀際も伝へがてねは、右なる大畧山の巖く峻峻を、岩頭に取り着き木の根に縋り、勞悩々々つゝ三間許り攀登りて、中半より左へ脱折れ、なごめに匍匐ひ行こと、二・三間はかりとおぼしきが、引路のもの、そこなる檜てふ樹の這ひわたれる根株に、手ごろなる糸綱の十間まりなるに、手のさらぬ料にとて、藁縄を二筋添したるを緊しく結びさげて、こに撮り着き玉ひて、心静に下り玉ひねと有から、慄々つゝ縋りつきて、魂も消ぬへき心ちして、僅に洑の後面なる溪に下りしハ、又二十間はかりも有つらむ、こゝに至りてふと心にうかひ出て、

けはしとは兼てし聞けと曲洑のかゝるへしとは思はさりけり

は思はさりけり

斯詠めつゝ往ほとに、両の岸弥高く、樹の蕭勃れるは更にも云はず、氣候やゝ変りて山の氣身にしミ、雪また処々に消残りて風冷やかに吹わたり、露を飛し雲を起して、その窈く凄寥たる」景様は、いへはえに謂むとするに詞なし。かくて往かまに／＼進むか随、溪谿いや狭く、嵩さかしく、或は怪しく尖れる石柯をふミ、あるひはなのめに布伸へたる磐巖を渉れるが中に、大き小さき石ともに、石の工の、精しく穿れるごときの窳あるもの、幾箇も有が、いと珍らしく見あかぬ心ちせり。あはれこもまた、前裁にうつしたらましかば、こよなき壯觀なるべし。

実に深山には、木にも石にも愛たき物の多なるは、郷里のたくひに然らざるなり。扱茲より左を眺望れば、赤く引しろひたる沢中に、雪白う見えたるあり。こを赤とひの沢といひ、又銚子の口ともいひて、此山なる一箇の名処とそ。斯て此峻しき路を、右に紆曲ひ左に周索し、なつみ行に、雪」甚しくきえ残りて溪流を壅塞るか、流るゝ水に穿たれて、自ら洞穴の形状為したる所に出にき。口の堅さも幅も、俱に一丈まりあるへく、いと慄淋しき構へなり。こにさしかりて引路の者のいひけらく、此雪洞を潜り往くより外に辿ん道し無れハ、こを軼ぬぬうちは、高やかなる声なあげ玉ひそ。又石とものさしかく置わたして、流るゝ水の激烈しく且深かれは、各も／＼底つ岩根をふむはりて、徐々に渡り玉ひね。雪のいろめはいまた水々しかれば、頼れ落むことはあらず。さのミは胸を懊悩し玉ひそと、いさましたてゝ、自ら先に進みしかは、誰も／＼おぢこうじ／＼つゝ、此雪洞を潜ミ行にいと曖々く、溪水崑にせかれて激湍く流れ、うへに覆へる雪は、巨浪を逆しまに掛たる如く、縦横に裂わたり、滴瀝る水は雨なして、解る韻籟は風の樹梢を吹に等しく、実に凌兢く悚しく、方今か崩頽なむ形勢にて、いみしく心裡を懊悩しゝが、僅事なく漕おふせて、始は黄泉飯れる心ちすれとも、猶舌暖がれ身も慄はるゝばかりなりけり。されは此辺にあり立る樹木ともは、夏の半に有つゝも、未だ葉をたも萌しえすて、ほと／＼冬枯の景況なるが、行々雪もはたらなしたる中や、独活・欵冬などの若やかに

はつく有しも、珍らしく見なかつ、程なく魚留てふ瀑布の下に出たりき。偕この滝はも、幅も丈も、俱に三丈はかりと覺しきが、第三の三の飛泉の末流にて、落る勢ひ太しく猛烈しかれば、魚の登りえぬとの意にて、名にや負しけむ。こゝも又路の壅絶にしあれば、引路のをのこ、右の片なる絶壁に蛟登り、半程ばかりなる樹根に、またかの綱を引廻らし、これを便に、ヤ々辛きを凌ぎ苦しきを堪えて、さしもの峻絶を踏み畢たるに、いさゞけき緩坦地に出たれば、互に吐息つきつゝ、猶しも崑頭を扶服ひ索り、二十間はかりにして右に肘折れ、さし出たる岬岸に至れば、三ツめの滝を望み見る片岬なり。実には名におふ大瀧にしあれば、轟く音の山に響きて悚しかるを、猶下より見むと、壁なし巖を二十間はかり這ひ下りて、滝のもとより見上ぐるに、巖に障へられて二段に飛走る形勢ひは、いと凛冽しく、うらぶれて、言のはの能く演へきにあらず。高さも十有八丈となも。此処にしまし立やすらひて、

空はしる安門の瀧のいかしきは称へむことの
 尽しえめやも

かくて茲より二の滝へ登れる路も、これと等しき険巒にし有れば、樹株を手撈へ岩角にすがり甚く難懐て三十間ほども踏みたるを、又直達に渡れること二十六・七間もあらむ、苦しきをねむじ喘息々々て、僅に二の瀧の末なる溪澗に出にき。此溪澗はし、水細にけさやかにて、大きき奇怪の崑とも、程よく位置らして、云ひもえずおもしろきに、岩を撃ち凡に逆らふ水の韻は、

玉を擾すかことく、琴瑟を奏つるか如く、いと幽静く閑雅にして、心の緒るも「濯濯たるもころに、殆り〱仙境の秘区ともあやしまれて、去りもえかての勝界なりけり。又此崖に、わつかの洞穴あるを覗き視れば、怪しき小鳥の飛も肯すあるを、やかて捕へたるに、形容も羽の文も、雲雀のごとなれとも、雲雀よりも大きく、尾は短かく、眼ことにするとくして、猛く烈しかりしが、引路のものに尋るに、未だ見もしらぬ鳥と云へり。深山にはさる怪しきものも有にこそ。偕こを右の方へ勾紆るに、直に二の滝のもとになも有ければ、先駭かれて、やがて眼を拭ひて眺るに、崑えし巖壁の、空洞なせる限の八十くま暗々める際や、たゞ一条に落下り、雲を払ひ霧をとばして、中宙に迸る形勢ひは、太しく激烈々々しく、高さは二十丈余」とぞ云ふなる。滝壺はわきて響らかにて、水は藍を流せることく、漣漪しく〱暈みてその深さをしらすえぬが、此方の右に十坪まりの浮岬あり、こは年々に變るとぞ。又滝のうしろの片岸に、彼流し木てふ薪材の、流れもあへすて多く浮べるに、引路の者の云ひけらく、昔より伐出せる木との、此湾に打沈み久しく出ずて、水層となるものいと多かるが中に、又しかく浮漂ひて流れもえぬ物、十巻にも及ひたらむ折には、山の大神に御酒奉りて、願こと聞え玉へるに、忽ち応驗ありて、一木も残らず流れいつると語られし。実にや神の御稜威の著明き、かしこむへき事にもなも。偕こを看罷て一の滝へゆくに、故来し溪へ立戻り、左なる峻巒のさかしき」を踏るに、

此路程はもことに長く、概略二丁余りも有つらむ、其かうちわきて迅速悪険しもて、辿るへき木株もなく、踏しむべき岩角もなく、身じろき肯ぬ処は四処ありき。さる半らひに、胡葱てふ草の、十間はかりの際に生ひわたらひ、最若やかにそよぎたるあり。杣人こゝを山人の葱崑と云へり。際山の巖壁に、葱の生出るは、必ず黄金を孕める地なりと、藉に見しが、こもまたさる宝の塾あらむもしるへあらず。偕かく巖絶路を難懐来しは、はじめ曲渕より此処に至りて、踏りに五回、下りに二回、巖頭顧上に犯触ばひて、小けき笠さへも冠りあへず、蹠直とは地につかず、たゞ爪端して攀登り、匍匐ひたるゝ為業にしあれば、蓋し片足も踐外したらしかは、五体破碎て、微塵ともなりぬべき巖壁なり。まことや漢人の語にも、險逼りて飛鳥墜つ、巖崖峻谷鳥も翔りかたし、なと云へるも、此処にはをさ〱増らまじとぞおもほえし。偕爰を軟り下る処を、布加那の沢と唱へて、南より流れ来るあり。流れのまに〱漕往けは、又西よりも流れあり、こを岡伊知古の沢と云ふ。此両の兎落合ひ、三十間はかりも流れきて、すなはち・第一の一の瀑布とぞなれりける。滝の頭の幅は、七間あまりと見やられたるが、巖く峻とき崑ともに激れ、白浪を散らし霧を飛して迸れる形勢は、淋慄しなと、舌し〱まりて云ひもえられず。偕此処の上の流れの、いさ〱か坦夷なたらかなる処をうち越えて、右の辺を伝ひ〱外れば、列なべ亘る嶺山の岬に、さ〱やかなる祠ありて、山祇を鎮座せり。此傍に

桜の巨樹の、周囲一丈まりのものゝ、滝を臨みて横様に生ひ立るあり。滝を観むには此樹にひと抱き着き、おぢこうじつゝ瞰下すに、其形勢、猛く烈しく、凄々、凌々、暗ミわたりて底際しれねは、眼眩き身体戦はれて、聊且も肯耐すなむ。高さは三十有六丈と云へれば、三つの滝ともの高きをすべるまへるに、七十有五丈なり。大八洲広き国にしあれと、こに立並はむものハ、又し有べしともおもほえずなむ。いてや此瀑布とも形相を、採総ていさゝか云むに、恰然白綿を大宙に掛渡せる如く、いためる風の白雪を飛すかごとく、玉を列ねて散らすか如く、妙に奇怪く、妙に麗美しく、又凛冽く、慄しく、墜る韻音は雷公なして、乾坤に動り響り、漲く煙は霧なして、ときじくに、虹蜺を現せり。一滝は東北に向ひ二十丈あまり落下りて、巖に塞り折れて東に向ひ、二滝は西北に向ひた。また両辺の巖壁は、巍々乎に屹立て中空に進り、画工のいはゆる、一のは鑿頭の皴文を累ね、二のは雲文を畳ミ、三のは斧劈を列ね、ミナ赤壁にして、隈のすかひに、五葉の松及び、種々の樹とも、所得がほに生ひ榮えて、奇麗しく愛しく、其壯觀の、隆盛なる事の上よなどは、意あまりて云ひもえす語りも肯すなむ。昔に悪険路を躰外れる勦勞も、此処に忘却て、心裡清々しく爽潔たるのミを所思たり。偕しか皆がら觀罷たれば、いさや飯らむと促したつるに、故來し路※7は、下らへがてなるよしにて、かの岡伊知古の溪澗に立戻れり。茲の両辺は、款冬てふもの甚しく生ひしゝみて、其巨大なるは、たけ七・八尺・周匝六・七寸の

もあれとも、葉はさしも大からずて、三・四尺の径りなり。引路のものゝ云けらく、こゝは端つかたゆえ、巨大なるものあらし、奥の茂みに至りては、たけ一丈なるものまゝあり、と語りけるに、己か供たる僕勘太てふもの、それ好き山苞なりとて、奥に潜きゆき、しましゝて三本採り来るを見れば、いかにも一丈も有べく、葉八五尺に近かるへし。こを見ると、誰もくゝ又しかせしか、帰り路のなづめるに耐へえて、路中に棄たりしは、いと惜しきが、勘太ひとり捨もあへずて持飯れり。又此二つの溪流に、鯀魚と云ふも多なれど、未だ候の至らぬげにや、他のゝより小さく、わつか二寸許りに有しなり。此小魚は、俗にいほゆる山椒魚なるが、漢藉に人魚としも名つけて、かの、秦の始皇が奥築の灯火に用ひし、人魚の膏と云ふは、即ち此小魚の油と云へり。こは茲に贅言なれとも、心にうかひたるまゝに記しぬ。偕此処より目もはるに眺望れば、許多の峯壑いやかうへに羅列亘らひ、或は昂く或は低く、近きは樹木鬱茂て其生氣籠嵒が如く、遠きは藍緑を含みて雲霧を凌ぎ、邃く幽なる景況は、神聖の冥府か、鬼魅の幽境か、更に人間の世の界区にあらじとぞ思ふ。茲を右に曲紆し左に索らひ、五・六丁なるへくして、右なる山に立踏れる頭に、何木に有けむ、周回一丈もあらましとお。ぼしき巨樹の、半は枯れて葉も枝も多からぬが、根より片岨に逆ぶし降り、地を這ひわたりて三間まり伸たるか、又高く叢り横にひらけて、左に右に紆り索らひ、十丈まりの間に蟠蜿れる、恰も蚪蛇の

蚪蛇ひ進む勢相なれば、怪しくも又凄かりしか。もしくも郷里にあらましかは、きはめて臥龍ナニキ何木、と名を負ふべきものにぞ有ける。こより直に巨樹ともいと多に繁ミたつ、いかしき幹を疎かして、枝に朶を組ミ葉に葉を交らひ、いミしく蔭りて日光を蔽ひかくし、道路とし索て躡躍るところは、峯の凸にて、俗に云ふ馬の背など云へる如く、両の岨は太く聳えてあれと、柴・楚などいと深く乱れほびこりたれば、谷の底際の見透ぬからに、「さしも嶄絶とはおもほえざれと、実に容易からぬ路にぞ有ける。又斯険しきか中に、甚く結ばひ蔭勃る柴林、処々にありて往えがてなる際に至れば、引路のもの、山刀てふ物して、荊刳刈削け、僅に路を啓きぬるに、そか往く先の跟のまにく、柴に捉つき樹株にすがめて、勞きく、外ること。十四・五丁・下ること。二十丁はかりにして、漸々に緩坦地に至れるに、柴も楚も多からすなれは、要時休憩ひて勞りを脩めたり。偕こよりいさゝか下る処に、樵夫等の宿歇し苫小屋の、住棄たるあるを、誰彼の人とも、道ゆきふりのすさひに立入りしに、丸木を穿れる桶めきたる物、飯ヒの形の、二尺はかりありて、端もと焼けたる物など有を見て、打興して語りあひたり。うち、小く瘦たる蚤の、むらゝと脛に飛付き、取りも尽しえねは、瘡きに堪へずて、傍なる溪流に下り立洗ひしかと、いたく噉ひ着て離れざるを、血出るほど搔て放ちたりき。すべて住捨たる山小屋にも、皆かく蚤の多くゐるとぞ。しかしてこを去り二丁はかりも来しころ、各も

くいミしく飢たるよしゝて行なづめるに、花田伝吾てふ人、小半合はかり盛るへき曲物の器に、味噌を入れたるを少しつゝこひうけ、溪水に拌和て飲たりしに、ヤゝ飢を凌ぎしが、実に世の諺に、ひもしき時はましひ物なしと云へることく、かゝる時ならては、いかて飲えむと互に笑ひあひしが、是より外れるも多なれと、さしも険しき路にはあらずて、嚮にわたりし曲渕の下なる溪澗に」出にき。されど飢のなほりしにあらねは、辛うして僅に、鬼河辺の苦屋にたとり着き、吏人はしる人なれとて、卒に飯を乞ふてたうへしが、其味ひの美かるは、類へるものなしとて、又も笑ひ合ひしなり。実に人里遠き山路を往きこふ人は、食物多に持へきものなり。偕こより二里に近き路をいそぎ、川原岱の邸に着しハ、既くも日くれて酉の刻も下れりとおぼゆ。世に云ふ川原岱の邸より、安門の一の滝まで三里といひつれと、三里半はあるべく、飯り路は四里あまりと覚えたり。冥や魑魅の塗を經、無人の境を踐といひ、地の険しきの窮ミ路の峻しき極ミなど、漢人の歌へるもかゝる処を云ふめり。偕此夜宿にて、岩なてふ溪魚の、「さか」はかりの物と、やまめてふ小魚の鮓と、大露・筍などの香のものを取まかなひて、あるじまふけしたるに、各も酒くミかはして、酔もほろゝにうまいねしけり。明る三日の日は、朝餉もかるく済し、よろこひ聞えて立出るに、空よく晴れわたりてうらゝにしあれは、又し名所ともを視直しつゝ、徐に路を打わたれるとも、未のくたつに己か宿に着て、

年久に思ひたとれる本意を遂にき、あはれうれしきかも。心よきかも。故この滝のおとろしき景況、ゆきかふ路の険しき形相、又うらぶれたるさま、麗しきさまなどを、人にも示さまくほりして、其概略をかつ／＼記し、真形を模写せる画卷に、添へたるになも。」
 時は文久二年といふとしの水無月十まり七日の日
 宏の舎の主人平尾の亮致誌

付ていふ。吾はし、草の片葉の、かよわき老の身とも省りミずて、かゝる険峻き路を踐わたりしは、その茲に至らぬ前は、いかさまにさかしき路なりとも、斯るべしとはえしも悟らず。啻画てふものは、正目にその地を視て、其景相に精密しからねは、妙なる境区に入かたしとある教への、年まねく心胸にしみてはなれ得ぬから、誘ふ水に流れて、ふとしもをちなき利心憤發せるなり。今しその跟をおもへば、舌嚙懼かれ、身うち戦慄われたるに、つゝみなく身をまたくして立飯りしは、いと／＼こよなき幸ひなりとおもほえし。されは世の人の事無らむには、若きに誇り健をたのミて、妄りに行見る地にあらず。況てや心怯き人、齢五十に踰たる人をや。吾かうミの子、うま子等、熟く此記を見、又画きなせるものを視て、必ずしもな行そね。必ずしもな行そね。
 あまそゝる安門の山の壁なすを踏あやまてはやはか活べき
 すけむねふたゝひしるす」

【頭注】

- ※1 (10丁左) 「発途の折ハ九人なりしか、此村に山口五郎八と云人、薪材方の吏人にて在しか、ともに促しつれて行し也、故十個の人とかけり。」
- ※2 (12丁右) 「大川と云ハこより下国吉まで、川と云也、岩木川と云ハ国吉より下をすへて云也とぞ。」
- ※3 (19丁右) 「此雪洞を潜て行こと四十間はかりは危険と思ひやるべし、されと年によりて二十間、又十二間も滞り、又六月の末七日にもなれば消てなきものとぞ、又四月の頃は此雪の上をわたり行と云へり、されは行ころによりて有無脩短は一定しかたし。」
- ※4 (20丁右) 「二十間程登りしハ滝壺よりにあらずかの差多にて、なほより登りし事なり、見誤るへからす。」
- ※5 (20丁左) 「此奇鳥は工藤楯彦捕りたるなり、図は画卷にあり。」
- ※6 (22丁右) 「此フカケの沢の上には水沢・ミよし崎の沢と云ふ二沢ありて、供にフカケ沢に落合ひ、又岡イチコの沢も落あひて滝となる故、もろ滝ともいひとそ、安門沢と云ハすへて此処の惣名也とぞ。」
- ※7 (23丁左) 「故来し路をふみ得さるハ、急峻にして手とるへき処、踏しむへき処を見る能ハさるからなり、故其躡る路の容易かり処をしるへし、又路なき岩山なれば、路と云ハたゝ飯りに云ひたる迄なり、坂なとのことくわさと作りたる道にはあらず。」

本田 伸 (ほんだ・しん)

青森県立郷土館 研究主幹

竹村俊哉 (たけむら・としや)

青森県立郷土館 学芸主幹